

会議録

会議の名称	西東京市子ども子育て審議会計画専門部会 第2回
開催日時	平成30年10月10日（水曜日）午後7時から9時まで
開催場所	西東京市役所田無庁舎2階 202・203会議室
出席者	部会員：谷川部会長、尾崎部会員、菅野部会員、古川部会員、吉野部会員 事務局：子育て支援部長 保谷、子育て支援部参与兼子育て支援課長 飯島、保育課長 遠藤、子育て支援部主幹（保育課） 岡田、西原保育園長 武田、こまどり保育園長 鳴海、やぎさわ保育園長 上岡、けやき保育園長 笹本、ひばりが丘保育園長 市川、児童青少年課長 原島、子ども家庭支援センター長 日下部、子育て支援課長補佐 渡邊、保育課長補佐 海老澤、児童青少年課長補佐 國府方、子育て支援課 栗林、八巻、保育課 古川、子ども家庭支援センター 金谷 欠席者：浜名部会員
議題	1 議題 (1) 第二期市町村子ども・子育て支援事業における「量の見込み」の算出等の考え方について (2) 子育て支援ニーズ調査(案)について 2 その他
会議資料の名称	資料1 幼稚園、保育所、認定こども園等の無償化について 資料2 第二期市町村子ども・子育て支援事業計画における「量の見込み」の算出等の考え方について 資料3 子育て支援ニーズ調査票（小学校就学前のお子さんの保護者の方） 資料4 子育て支援ニーズ調査票（小学生のお子さんの保護者の方） 資料5 ニーズ調査票に関するご意見と今回案での対応
記録方法	<input type="checkbox"/> 全文記録 <input checked="" type="checkbox"/> 発言者の発言内容ごとの要点記録 <input type="checkbox"/> 会議内容の要点記録
会議内容	
<p>1 議題</p> <p>(1) 第二期市町村子ども・子育て支援事業における「量の見込み」の算出等の考え方について</p> <p>○谷川部会長： 事務局より説明をお願いします。</p> <p>（事務局から資料1、資料2について説明）</p> <p>○事務局： 資料1は、来年度に予定されている幼稚園、保育所、認定こども園等の無償化について、国から提供された資料である。 資料2の「量の見込み」の算出については、当初の7月予定から遅れて8月24日に「第二期市町村子ども・子育て支援事業計画における『量の見込み』の算出等の考え方について」が国から発出されたが、無償化の予定に対する新たな考え方などは、具体的には示されなかった。</p>	

○谷川部会長：

何か質問等はあるか。

○吉野部会員：

幼児教育の無償化は影響の大きい事柄であり注目していた。財政面では、国が全額負担するのではないとすると市の負担も心配である。すでに市は多くの施設を整備しているので気になるところである。

○谷川部会長：

無償化によって世の中の動向がどのようになっていくのかは、なかなか分かりにくいように思う。

○吉野部会員：

無償化については保護者の方々の関心がとても高い。私たちの園は13時間開所をしているが、お子さんを8～11時間くらいお預かりすることが多い。そのため、6時間以上については延長として徴収するかたちになるかもしれないというような曖昧な噂話も流れてくる。分かりにくいことも多く、混乱が心配である。

○谷川部会長：

かねてより審議会等では、認可保育所とその他の保育施設との利用負担の差について議論を重ねてきた。すべて無償化となるとこれらの議論も一旦リセットされるようで、多少残念な気持ちにもなる。

○古川部会員：

公平と言えないのではないか。本来全て無償化しないとおかしい。幼稚園における月2.57万円までという額の算出の基準は、平成24年度の調査に基づく全国平均のデータと聞いている。地方と東京では状況が異なるうえ、古い数値を基準にしていることで現実からかけ離れたものになっていると思う。東京では追加徴収が必要となり、しかも結構な額になる可能性もあるのではないか。それにより無償化に対する誤解も招きやすくなるのではないか。

資料1のただし書に、「実費として徴収されている費用（通園送迎費、食材料費、行事費など）は無償化の対象外。」と記載されている。保育所については食材料費や教材費等については無償になっているのに、幼稚園については話が別となってしまう。認可外保育施設も含めて全て平等にするのであればわかるが、凸凹が生じてしまい、逆に格差を生んでいるのではないかと思わせるようなものにもなっている。

無償化のような施策では、国が全てをやってくれるように当初思われても、結局は市区町村にかなりの負担が強いられるようになることが多い。今回も、無償化の財源をどこかで捻出しなければならない、他の分野で削る部分を見つけなければならないなどの問題が生まれるかもしれない。

○谷川部会長：

選択肢は増えていってほしいと思うし、障害児通園施設を利用している人にとって今

回の無償化はとても助かるのではないかと考える。

しかし資料では、無償といいながらも上限金額が設けられているので実質的に無償とはいえない。幼稚園で、無償化の枠からはみ出るのはこの程度ですという値下げ合戦が始まるようなおかしな風潮にもなりかねない。また、それにより保育の質が担保できなくなってしまうのでは困る。計画の策定についても、これまでになかった変化に直面しているといえるだろう。

○古川部会員：

なぜ、一律いくらまで出しますというようなシンプルなやり方ができないのだろうか。例えば、どこの施設を利用しても子ども一人に対して3万円が出るというように分かりやすくすればよい。親御さんにはいろいろな考え方や立場があり、自分たちがいいと思う施設に預けられるようにするのが一番いい。本当の選択の自由が生まれると思う。

○谷川部会長：

この無償化の動きを捉えて、計画を策定していく必要がある。ファミリー・サポート・センター事業も対象になるということなので、利用者がうまく使っていけるようになってほしいとも考える。

一方で「幼児教育の無償化の具体的なイメージ(例)」の記載に「専業主婦(夫)家庭など」という表現があるがこれはわざわざ載せる意味があるのかどうか疑問である。

○古川部会員：

残念ながら考え方がフラットになっていないし、時代遅れだと思う。

○谷川部会長：

どちらかの親が働いていない家庭は保育所以外のところに行くのが普通ですよという考えなのかもしれない。

○古川部会員：

現実はずう。例えば保育所に預けていても仕事は短時間という方もいるし、幼稚園に預けていても子どもがいない時間帯は毎日パートに出ているという方も多い。正社員でも仕事をコントロールしながら、幼稚園の預かり保育を利用している方もいる。「専業主婦(夫)家庭など」という言い方は決めつけだと思う。

○谷川部会長：

0歳から2歳の住民税非課税世帯についての月4.2万円まで無償というのも、そもそも住民税非課税世帯自体がそれほど多くはないし、既にやっていることだ。

○古川部会員：

子育てをしている家庭の一番多い層に、よかったなと思ってもらえるような施策であるべき。経済的に困っている家庭に手を差し伸べるのは当たり前であり、それをいかにも新たに行うかのように見せるのはおかしいと感じる。

○谷川部会長：

そういった部分も感じるが、なんとか少しでもうまく制度を使っていきたいと思う。

(2) 子育て支援ニーズ調査(案)について

○谷川部会長：

事務局より説明をお願いします。

(事務局から資料3～5について説明)

○谷川部会長：

調査票については、各自が一度やってみた方がよいだろう。私の気づいた点を言う。祖父母が育てている場合やセクシャルマイノリティのパートナーがいる場合など多様な家族形態がある中で、母親、父親という聞き方はいいのだろうか。問1にお子さんからみた関係で「その他」という選択肢があるが、「その他」の方々はどのように回答したらいいのか。市のルールのようなものはないのか。「父親や母親が子育てをしているのではない家庭の人は、このように読み替えて答えてください」というようなことを問6の下に書くことも考えられる。市ではこのような調査を数多くやっていると思うがどうだろうか。

○事務局：

子育てに関するアンケートとなると、他の部署に例があるかどうかは分からない。

○谷川部会長：

そのような形態の家庭の方々は、そういう扱いに慣れていると思うが、何もアプローチをしていないのはこのご時世の中でどうなのか。例えば、同性パートナーの方で、片方が異性のパートナーと結婚していた時にできた子どもがいて、今は同性パートナーと暮らしているという方もいると思う。ただし、あまり複雑にならない方がいい。どちらが母親あるいは母親の役割を担っているかということまでは必要ない。

○菅野部会員：

例えば、問6①の上の【問6で「2」（主に母親）、「3」（主に父親）のいずれかに○をした方】を【問6で「1」以外に○をした方】とすれば拾えると思う。要するに、ワンオペであるということが拾えるならいいのではないか。

○谷川部会長：

問6①の8に「母親または父親がいないため」という項目もあるので、配偶者がいない人はここに○をつけることになる。それを言い始めると、配偶者って何なの？ということにもなる。

○菅野部会員：

そうすると、問6①の9「その他」に書くことになるだろう。

○谷川部会長：

ここで聞きたいのは、本来、養育にかかわることができる人が複数いるのに、片一方がやっているのはなぜですか、ということ。例えば、祖父母であった場合、祖母が一生懸命やっていたとしても祖父は子育てをしていないなど。完璧にはカバーできないかもしれないが、そういうつもりで答えてね、ということになる。

○菅野部会員：

一人で頑張っている人も多い。

○古川部会員：

理由が分かるとどのようなところに繋がってくるだろうか。一人で子育てをしているのはなぜ、と聞くわけだから。

○谷川部会長：

今の古川部会員のそもそものご指摘は問6①を聞いてどうするのかということ。何もしないのであれば聞く必要もないということになる。

○古川部会員：

その通りだが、過去のデータと比較をするのであれば必要な項目ではある。例えば、意識の変化を捉えるというような場合だが。

○谷川部会長：

平成25年度の調査では父親に限って聞いている。82%とダントツで「4 仕事が忙しくて、子育てする時間が取れないため」となっている。この問6とクロスをかけている他の項目はあるかということと特に見当たらない。必要なければやめるという選択肢もある。やめると困る理由は事務局としてあるか。

○事務局：

この設問を用意した理由としては、片親が育児に参加できない理由が仕事にあるのであれば、育児参加ができるような社会を目指していくために、計画に反映させる根拠とするためとも考えられる。

○谷川部会長：

それはアンケートで聞かなくてもできることではないだろうか。

○事務局：

5年前の状況と現在を比較してみるということは考えられる。

○谷川部会長：

5年前は「父親」について聞き、今回は「母親」または「父親」と聞いたら、もう比較はできなくなってしまふ。

○事務局：

このような項目にしているが、直前の設問とのクロス集計をすれば、同じ結果を見ることはできる。もし不要という判断になるのであれば削除についても検討したい。

○谷川部会長：

クロス集計をして、それを施策に反映させるのであれば聞いてもいいと考えるが、少なくとも5年前は「4 仕事が忙しくて、子育てする時間が取れないため」に8割もついている。これで上の問題とクロスをかけても、それで何になるの、ということになってしまうのではないか。

○古川部会員：

研究するのであれば取りたい項目ではあると思う。母親からすると、子育てにかかわれない理由はこういうこと、父親からすればこういう理由で、と、両者の差異が分かるのはいいと思う。それから先ほどの祖父母の話、セクシャルマイノリティのことも絡めていくと、そのような方々の傾向も知ることができるので研究分析としては興味深い。

○谷川部会長：

もし統計を取るのであれば、問1、問6、問6①をかければできるわけだが、果たしてそれを分析して施策に反映するのかということだと思う。

○古川部会員：

市民が考えていることはこういうことだということであれば、おもしろいともいえるが、なかなか難しい。

○事務局：

5年前の経緯を説明させていただく。ワイワイプランをつくる前の調査の時にも、母親が育児をしている割合が高く、父親が育児に参加していないという実態があった。そうであれば父親がなぜ育児に参加しないのかを調査してみようということになり、この設問が提起されたものである。

○古川部会員：

私も5年前は一緒に調査しているので経緯については覚えているが、この設問については研究などに使う場合ならば必要性もあるだろう。育児に参加できないほど仕事が大変なのであれば、まず市の中で働き方改革を実施して、お子さんが生まれた家庭については男女問わず育児休暇が取りやすくなるなど、施策に反映できるのであればそれはとても良いことだと思う。しかしそこまで動かせるか分からないのに聞くのはどうなのかとも考える。アンケートで聞かれると回答者側は何かやってくれるであろうと期待を抱くことになるので、そこがアンケートの難しいところだと思う。

○事務局：

先ほど経緯の話があったが、「イクメン」という言葉が世間で使われるようになった頃とも思う。問6①の選択肢の中の「4 仕事が忙しくて、子育てする時間が取れないため」は、保育に欠けている状態であることが分かるので聞く必要はあると考える。ま

た「5 育児はどちらの親がすればよいと思うため」「6 関心がないため」については、どれだけ〇がつくのかということに注目した方がいいと考える。これを選んだ方々は子育てにあまり関心がないということを示すことになるので、子育てに関わる親を育てるという意味においても把握する必要があるのではないだろうか。

○谷川部会長：

この設問に引っ掛かりを感じるのは、家族の形態がさまざまなのに、なぜ「母親」「父親」と限って聞くのかということである。例えば、夫婦と子どもと祖父母で住んでいて、夫婦は子育てをやらずに祖父母任せにしている家庭。しかも祖父は子育てに関心が薄いため、祖母が孤軍奮闘しているといった家庭はかなりある。そのような家庭はここで回答しないことになってしまう。それでいいのだろうかと思う。

○古川部会員：

設問としては、時代をあぶり出すような内容にもなっていて有益であると思う。しかしながら、谷川部会長がおっしゃったような部分を見ると、先ほど提案をいただいたかたちにするのがいいのではないだろうか。

○谷川部会長：

本来、養育に関わることができる人がいるのにもかかわらず、その人が関わらないのはなぜですか、というような聞き方であれば、うちのおじいちゃんは何の手伝わないのかということも拾うことができると考える。

しかし、いずれにしても読み替えの検討は必要ではないだろうか。同性パートナーの方々の場合は、どちらが母親で父親なのかという役割分担を決めていないことも多いので、先進自治体でどのような表現を用いているのか問い合わせるなどしていただきたい。もし断り書きのようなかたちでカバーできるのであれば、それがいいと考える。

続いて、今回の調査票から削除する項目について確認をしておきたい。資料5「ニーズ調査票に関するご意見と今回案での対応」の中から、No. 12「送迎保育ステーションを使う保育を利用したいか」、No. 13「待機児童を減らすために、効果的な取り組みは何だと思うか」、No. 14「赤ちゃん・ふらっと」の3項目については、計画専門部会としては削除ということで合意を得たこととしたい。

あとは、前回いただいた意見の中に「前回の調査時にはなかった子ども条例に関する視点からの設問などを検討すべき」というものがあった。今回、それを受けて、未就学児童では問35と問36、小学生では問33と問36が新設されているが、この点について何か意見等はあるか。

○古川部会員：

問35は、子育てについて感じることの設問であるが、文章表現として少し違和感がある。例えば、「④子どもの成長が気になる」という表現にはマイナスイメージを感じてしまう。他に適切な表現があるかは分からないが「子どもの成長が楽しみ」などとした方がいいと思う。

○谷川部会長：

例えば「子どもとの生活を楽しめている」という言い方もできる。

○古川部会員：

そのようなフワッとした表現の方が合っていると思う。

○谷川部会長：

「子どもがいることで自分の人生が豊かになっていると感じる」という表現もできる。問35については、①と②はポジティブな印象だが、③以降はネガティブな印象になっている。

○古川部会員：

「育て」という言葉がついてしまうと、責任を伴う窮屈な感じになってしまう。もう少し柔らかな感じにして、ポジティブとネガティブが半々くらいになっていくといいのではないか。

○事務局：

前回の調査票には、問37「子育てを楽しんでいると感じることが多いと思いますか。それともつらいと感じることが多いですか」という設問があり、今回はそこを拡充するかたちで、子ども条例の施行とも関連して今の気持ちというものを選んでいただきたいと考えたものである。

○古川部会員：

前回の設問よりも良くなっていると思うが、「育て」という言葉がつくことによって、ニュアンスに違いが出てきてしまっている面もある。

○谷川部会長：

「子どもとの生活が楽しい」というようなニュアンスだと思う。子どもがいると家庭は明るくも暗くもなる。

○尾崎部会員：

「④子どもの成長が気になる」も、肯定的な意味でケアをたくさんしたいという意味での「気になる」と、将来の不安が多いという意味での「気になる」があり、ポジティブにもネガティブにも感じるようになってしまうので、「気になる」という言葉ではない方がいいと思う。「成長が楽しみだ」とか「期待している」であればいいと考えるが、誤解されてしまう可能性が高い。

○谷川部会長：

事務局で、もう少し文言の調整をしていただき、ポジティブとネガティブが半々になるようにしていただきたい。

○事務局：

文言について調整する。⑥⑦⑧については、先般ご意見をいただいた子どもの貧困対策に関連するものとして設けたものでもあるため、この3つは残し、その他の設問の文言を調整したい。

○谷川部会長：

「⑦地域の中で孤立している感じがする」というのも、地域だけでなく家庭の中で孤立している可能性もあるわけなので、例えば「一人ぼっちで子育てをしている気持ちになる」などにした方がいいかもしれない。また、「⑥子育てにかかる経済的な負担を感じる」という設問はそのままでもいいと思う。

○古川部会員：

「⑤自分の時間がとれず自由がない」という表現は、少し極端な印象を受ける。

○菅野部会員：

ただ、同じことを考えている人は多いと思う。個人の感覚でアンケートに回答をするわけなので、個人個人で違いは出てくると思う。

○谷川部会長：

事務局で①～⑤についてもう一度練っていただき、8項目にするのであれば、③と④をポジティブなニュアンスに変更してくれた方がいいと思う。

○古川部会員：

項目数を増やすことは難しいか。

○事務局：

レイアウトを工夫すれば、項目数を増やすことは可能と思う。

○谷川部会長：

ただ、調査票のレイアウトとしては現状の数の収まりが良いとも言える。

○菅野部会員：

①と②はうまくまとめられると思う。

○谷川部会長：

子どもがいることで仕事にやる気が出るということもあるし、自分のモチベーションが上がり、子どもがいることで生活が充実しているとも考えられる。また、③と④は曖昧な表現でもあるので、例えば「子どものことを考えると気持ちが暗くなる」とまとめてもいいと思う。

○菅野部会員：

子育てに不安があるということだろう。ネガティブな設問が多くなってしまうが、むしろその部分を聞き出した方がいいわけでもある。

○谷川部会長：

この設問は、就学前と小学生で共通にしたのか。

○事務局：

共通にしてある。小学生の方がスペース的には余裕がない。陥りやすいと思われる問題や不安感、抱え込みやすい悩みなどを後半に持ってきていることもあり、比率としても多い印象になっている部分はある。楽しいか、楽しくないのかというような一つの軸で測れるものではないため、持っている気持ちを把握するためにこのような内容となっている。

○谷川部会長：

子育ては100%楽しいだけではないので、その意図はよく分かる。

○古川部会員：

しかし、やはりプラスとマイナスのイメージは半々にするべき。マイナスイメージが多いとトータルとして出てくる結果もマイナスイメージの方が多くなってしまう。

○吉野部会員：

お子さんが小学生くらいになると、子育てがこんな感じだということが分かってきて、お母さんとお父さんになることに慣れてくるが、やはり乳幼児の時は、すごく不安な気持ちでいることが多い。設問にはネガティブな言葉が並んでいるけれども、自分の気持ちをこのように書けるとするのは悪くないのではないかと感じる。小学生の方はもう少しポジティブな内容でもいいとも思うが、このような設問になっているということは分かるような気がする。

○古川部会員：

確かにこういう設問があると、自分だけでなくみんなそうなのかもしれないと思う部分もあるかもしれない。

○吉野部会員：

子ども条例ができて、このような設問との繋がりが生まれてきている。

○谷川部会長：

他の設問については何か意見等はあるか。

○菅野部会員：

問39では「たたく」という表現が使われているが、現在は言葉の暴力がとても多くなっている。

○古川部会員：

言葉を発している本人が言葉の暴力になっているということを自覚していない場合があるのではないか。

○菅野部会員：

親はしつけだと言うが、子どもにとっては暴力になっている場合がある。

○谷川部会長：

例えば「お子さんに暴力をふるうことがありますか（言葉の暴力を含む）」という設問は考えられるのではないか。この場合はネグレクトも含むことになる。また、たたくだけではなく、蹴るもあるし、物を投げる場合もある。

○菅野部会員：

食事を与えないということもある。代表的な表現として、たたくという行為では把握が難しくなっている。

○尾崎部会員：

実際に暴力があったとしても、親はそれを暴力として認めていないからやっているわけで、聞かれても「やっていない」と答えるだろう。暴力という文言ではなく、子ども側の視点に立って「子どもが嫌がることをする」「子どもを追いつめる」というような表現にするべきではないか。

○谷川部会長：

以前の調査では「普通に言っても分からないから」「イライラしていたから」という回答がとて多くなっていた。これまでのデータと比較するのであれば、このままにする必要がある。この問39については、「たたく」という表現を変更すべきという意見もあったが、過去のデータとの比較をするためにこのままにして良いかということ審議会にかけることとしたい。

また、調査票については、計画専門部会のメンバーで分担して、一市民の立場で回答してみて、フィードバックが必要な事項があれば事務局へメールで送ることとしたい。それを事務局にて取りまとめていただき、10月19日の審議会にかけてもらうこととする。

2 その他

○谷川部会長：

事務局からの連絡事項をお願いする。

○事務局：

次回の専門部会は12月12日(水)午前10時から田無庁舎5階の503会議室で開催する。

○谷川部会長：

以上で本日の第2回計画専門部会は閉会とする。

閉会